白秋アートギャラリー（26）

『詩人のわかれ』の白秋

三沢左右

先日、兵庫県芦屋市にある谷崎潤一郎記念館に足を運んだ。谷崎と白秋には親しい往来があったらしいが、館内の展示には交流を示す資料は見つけられなかった。ただ、谷崎に、白秋をモデルに書かれた短編『詩人のわかれ』があることを調べていたので、資料館の隣の図書館で谷崎全集を開き、『詩人のわかれ』を読んでみた。初出は「新小説」大正六年四月号。後年書かれた自解が冒頭に付され、短編内の登場人物四人について「Aは吉井勇、Bは長田秀雄、Cは自分、Fは紫烟草舎時代の故北原白秋のことである。（中略）此の中には、三十歳前後の自分たちの姿がありのままに描かれている」と記される。

芸術への志を同じくする作家四人それぞれの個性が見事に描き分けられた本作だが、後半、F（白秋）ひとりにスポットライトの当たる幻想的な結末に意表を突かれる。友らと別れたものの、妻の待つ家に帰り着けず野辺に臥したFの目の前に、インドの神の姿が顕ち現われ、神の足の指先から「彼の大好きな南洋の果実ザムボアの汁」が滴るという幕切れだ。日常と幻想、土着の風土と異国情緒、それらの間を軽やかに行き来するのは、白秋と谷崎とに共通する資質かもしれない。

『詩人のわかれ』執筆当時、白秋は二人目の妻章子との新婚生活を窮乏の中に送っていた。谷崎の自解にもある邸宅「紫烟草舎」について、大正六年刊行の白秋の詩文集『白秋小品』に、以下の記述があり、白秋の詩想が実生活と不可分であったこと、詩が苦しい現実から飛翔する契機であったことが伺える。

（前略）妻がもう夕餐（ゆふげ）の煙を立ててゐる。私はたまらなくなつて茄子やもろこしの間を駈（か）け抜（ぬ）けた。

紫の煙！　紫の煙！　私は私達のこの畑の中の新居を、その晩、紫烟草舎と名をつけた。

また、雑誌「朱欒（ザンボア）」を刊行していたこともある白秋は、同集の中で果実「朱欒（ザボン）」への思いを熱を込めて綴る。

わたしはそなたがなつかしい、而してその実に頬ずりしてはちやうどパライソオの空のこころでもさしのぞくやうに長崎の街をゆめ見てゐた幼年時代がなつかしい。

ああ。ZAMBOA. ZAMBOA.……

生活を見つめ、幼時の愛着を心にあたため、詩の世界に遊ぶ白秋を、文豪谷崎も愛したのだろう。